

## “ジューン・ブライド”みたいに明るく！



梅雨の季節がやってきました。ジメジメとうっとうしい時期をさわやかに送るために、ネットで6月の由来をあたってみました。まず「6月」にはいろいろな呼称があるのに驚きました。水無月、水張月、水月、風待月、松風月、青水無月、蟬羽月、鳴神月、田草月、夏越月、焦月、……



もっとも多く使われているのは「水無月」でしょう。「みなづき」と読み由来にはいろんな説があります。文字通り梅雨が明けて水が涸れて無くなる月であると解釈されることが多いようですが、逆に田植が終わって田んぼに水を張る必要のある月「水張月(みずはりづき)」「水月(みなづき)」であるとする説も有力。

ほかに、田植という大仕事を終えた月「皆仕尽(みなしつき)」であるとする説、水無月の「無」は「の」という意味の連体助詞「な」であり「水の月」であるとする説など。

梅雨時の新暦 6 月の異称として用いられるようになってからは、「梅雨で天の水がなくなる月」「田植で水が必要になる月」といった解釈も行われるようになった、とのこと。

初夏から仲夏の季にあたり、中旬には梅雨入り、下旬には一年中でもっとも昼の長い日、夏至がきます。田植時で、麦の色づく麦秋の季節でもあって、農家にとっては多忙な月ですよ。8 月と並んで国民の祝日が無い。その上、お盆のような休暇も取れない月ともいえます。



季節の言葉として: 初夏、麦秋、梅雨、入梅、梅雨空、梅雨晴れ、長雨、田植え、海霧、…とあり; 季語にも、花菖蒲、アイリス、グラジオラス、柚の花、柿の花、あやめ、花橘、蜜柑の花、オリーブの花、紫陽花、葵、鈴蘭、入梅、梅雨、蝸牛、雨蛙、河鹿、さくらんぼ、早苗、田植、田草取、鮎、ゲジゲジ、ぼうふら蚊、蚊帳、白夜、夏至、仏法僧、木苺、苺、若竹、夏衣、単衣、夏服、競馬、……と 100 を超えています。

俳句(有名・無名)もネットで紹介されています。その中から私的に「いいな」と思った句は:

苔寺の雨に染まりし青蛙      安曇野の田植盛りや道祖神      紫陽花の濡れつつ色を尽しけり

最後に、6 月を彩る光景といえばやはり「ジューン・ブライド」でしょうか。英語名の「June」はローマ神話のジュピターの妻ジュノーから取られた。ジュノーが結婚生活の守護神であることから、6 月に結婚式を挙げる花嫁を「June bride(6 月の花嫁)」と呼び、この月に結婚をすると幸せになれるといわれています。



昨年 6 月、文学紀行の取材でロシアを訪れた際には、数えきれないほどの新婚のカップルに会って心もワクワクしたものです。「やっぱり花嫁さんはきれいだナ！！」

(詳しくは別途「名作の舞台を訪ねて=June Bride in Russia」をご覧ください)